
神の孫と真緑の瞳

千乃木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の孫と真緑の瞳

【Nコード】

N9545Y

【作者名】

千乃木 零

【あらすじ】

事故に巻き込まれて死んだ蒼木龍斗は、まだ幼い頃に姿を消した祖母と出会う。祖母の正体は神様！で龍斗は転生すること！？

神の血を継ぐ少年はその瞳に何を映すのか？

初めての投稿で未熟な文章ですが、よろしくお願いします。

第一話：優しき過去

それは、過ぎ去った時、愛しく優しい記憶。

闇よりも深い青みがかった黒髪と黒曜石の瞳を持つ初老の男性が家の柱にもたれて、庭を見ている。

その視先の先に居るのは、男性と同じぐらいの年齢の女性とまだ三、四歳ぐらいの男の子だった。

女性は明るいブラウンの髪を結い上げ、自分の服を掴んでいる子供を見てセピア色の眼を細めている。子供は男性と同じ黒髪黒瞳で、女性とよく似た顔立ちをしていた。

夕焼けの空をトンボが飛び回っている姿を子供は熱心に目で追っていた。

女性がふと思いついた顔で腕を伸ばし、指を上に向ける。すると、その指にトンボがとまった。

「わあー。すごい。おばあちゃんそれってどうするの？僕もやりたい」

トンボが自分からやって来たことに驚いて、自分もしたいとねだる子供に女性は苦笑しながら膝を折って視線を合わせる。

「そんなに騒いでいては、トンボは近付いてきてくれないよ。優しく、心で呼ぶんだよ」

「心で呼ぶ？」

「そうだよ。命あるものには魂があり、心がある。ひとつひとつが違ふものだけど、必ずあるんだよ」

子供は首を傾げながら女性を見上げている。そんな子供の様子を見て、クスクスと笑いながら女性は優しく子供の頭を撫でた。

もう、戻ることのない光景は優しく、愛しく、切ないものだった。

第二話：事故（前書き）

ええと、かなり短い文章ですがこの話と次話で異世界トリップします。

第二話：事故

「お疲れさま。お先に失礼します」

蒼木龍斗は隣の席の同僚に声をかけて、席を立つ。
手早く荷物をまとめると足早に会社を退社した。

「ふう、あつ」。もう9月になるのに、なんでこんなに暑いんだ」
会社を出てすぐに強い日差しに当てられて、思わず呻いてしまう。
しかし、文句を言っても気温には変化はないので、すぐに歩き出す。

「おい！龍斗。こっち、こっち」

陽気に自分の名前を呼ぶ声に顔を向けると、五人の男女がこちらに
向けて手を振っている。

「ごめん。待たせた？」

集まる予定のメンバーが、自分以外全員集まっているのを見て、龍
斗は頭を下げる。

「えー。そんなに気にしないでよ。仕事忙しかったんでしょ？」

「そんなに長い時間待った訳じゃないぞ。俺なんて五分前に来たばかりだ。」

五人のなかで快達な感じの女性と男性から軽い返事が返り、龍斗は

顔を上げて苦笑した。

とりあえず、大学時代から常連となっているカクテルバーに行くことになり、雑談を交わしながら歩いて行く。

「でさ、その子大学生で、剣道やってるんだって。龍斗のこと話したら、すごい興奮して、質問攻めにされたんだぜ。親しくはなれたけどなんか複雑…」

話の流れで恋愛話になり、龍斗は少し居心地が悪い思いをしていた。

「そらそうでしょう。剣道の全国ナンバーワンと自分を比べてるあんたが可笑しいのよ」

「ふふ、龍斗はかつこいいからモテモテだね」

「顔良し、頭良し、おまけにめちやくちや強いとか、理不尽じゃないか？」

「いえ、あの。龍斗君が悪い訳じゃないんだし…」

龍斗は中性的で整った顔をしているのでかなりモテる。だが、龍斗自身は告白されてもその気になれず、今まで誰とも付き合っていない。

実を言うと好みのタイプなどもよく分かっていたいなかった。

五人で龍斗をからかいながら、カクテルバーのすぐそばまでやって来た。

ふっと何かに気付いたように龍斗は顔を上げ、続いて顔をしかめた。

「龍斗、どうかしたのか？」

その変化に気付いた男性の一人がわずかに不安を伴う口調できく。

龍斗は目を細めて、真剣にこれから行くことになっていた2階建の建物を観ている。

「なんというか……。ここ、今日はやめた方がいいかも……」

龍斗の警戒心が混じった返事を聞いて、五人は残念そうな顔になった。だが、誰も龍斗の意見に反対しなかった。

龍斗は勘が鋭い。付き合いの長い五人は、その事をよく知っていた。前に一度、龍斗が反対したレストランに入った時に不良達の喧嘩に巻き込まれたこともあった。

全員龍斗に叩きのめされたが…。

「じゃあさ、駅の近くにできた居酒屋さんに行かない。

先輩が、料理がおいしいって、言ってたよ」

その言葉に全員が賛成し、その場を後にする。龍斗は一度振り返って、じっとその建物を見ていたが、友人の一人に呼ばれて歩き出す。建物を見ていた龍斗の瞳には僅かに緑色の光が瞬いていた。

龍斗達が立ち去ってから暫くすると、そのカクテルバーに強盗達はいっていった。

「うゝん。今日も暑いな。でも、今日は営業で走り回る必要はないし、昨日よりは楽かな」

一夜あけて、龍斗は仕事に向かうために通い慣れた道を歩いていた。大通りに差し掛かり信号待ちをしていると、いきなり背筋にザアーと悪寒が走った。

（なんだ？昨日よりも強い嫌な予感がする。一体どこから…）

龍斗は予感に従って僅かに緑色の光が瞬き始めた瞳を背後に向ける。

ザアー、ザアー、ザアー…

その途端頭にノイズが走り、目の前の光景が揺らぐ。揺らぐ視界の中で大型のトラックが曲がり角の内側にいたバイクに気づかず、転倒して道路上を滑って行く光景が映し出される。その光景の中、トラックが進む先には……

二人の子供が近づく脅威に気づかずに笑顔で笑い合っていた。

プツン…

唐突に視界が戻りノイズも消える。

（今のは一体？）

突然見えた光景と今日の前にあるなんの異常もない光景とが噛み合わず、龍斗は軽い混乱に見舞われた。

ふっと、目の前に伸びる道路上をこちらに向けて歩いて来る二人の子供が目に入る。

（あの子達は、さっき見えた事故でトラックが衝突した……）

混乱している龍斗の目の端に奥の曲がり角を曲がろうとしているトラックが映り込む。

（まさか！？）

龍斗は確証もない自分の予感に背を押されて走り出す。

龍斗は自分の目に時折、人に見えないものが映ることは知っていたが、それはなんとなく感じる嫌な予感が視覚的に靄のようなものになって見えているだけで、ここまでのはっきりしたものが見えたのは初めてだった。

それでも龍斗には今見たものが確実に起こることだと確信していた。それは本能的な確信だった。

ガッツ！

龍斗の確信を裏付けるようにトラックが並走していたバイクに気づかず曲がり角でぶつかった。

衝突の衝撃でコントロールを失ったトラックは、自分達に危機が迫っていることに気づいていない子供達に向かっていく。

（やばい！間に合うか？）

龍斗は後先考えずに子供達を渾身の力で弾き飛ばしていた。

（良かった。間に合った）

龍斗が子供達の無事を理解した瞬間…

体に巨大な質量を持った物体がぶつかり、身体中を激痛が走り抜ける。

子供達の泣き声が聞こえたのを最後に龍斗の意識は闇の飲み込まれた。

第三話・再会（前書き）

ええと、すごく遅くなって申し訳ございません。

第三話：再会

「うーん。どうなってんだ一体？」

龍斗は横になっていた状態から体を起こす。

「ん？体が痛くない……。俺って確かトラックにひかれて……」

気を失う直前のことを思い出して、慌てて体を確認し、傷がないことに驚いて辺りを見回す。

そこは見渡す限り真っ白な空間だった。

「ええと、ここどこ？もしかして死後の世界？」

自分で言っ、つい納得しそうな結論に龍斗は乾いた笑みを浮かべた。

「しかし、こんな何もない空間にいてもどうすればいいのか分からないな……」

「龍斗！」

龍斗が頭を抱えて唸っていると、自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「へ？……な！」

龍斗が声に反応して振り向くと、そこには二十代半ばぐらいの、腰

まで流れる清流のような銀色の髪と宝石のような緑色の瞳をもつ女性が、感極まったように泣きながらこちらを見ていた。
なぜこんなところに人がいるのかはともかく、女性が泣いていることに驚いて、龍斗は声をかけられないまま困惑していた。

「ええと、あの……。あなたは一体……、わぁ!？」

とりあえず、女性にここがどこか尋ねようと、龍斗が女性に話しかけると女性は答えずに駆け寄って来て、ガバツと抱きついてきた。

いきなり抱きつかれて龍斗は困惑したが、女性があまりにも嬉しそうに名前を呼びながら抱きついてくるので、無下にする気はおきず、宥めるように背中を撫でた。

……十分後。

やっと女性が落ち着き、離れてくれたので今は向かい合つかたちで座っている。

「ええと……。ごめんなさいね。いきなり抱きついて……」

女性は抱擁を解くとちよつと照れくさそうに謝罪する。

その顔にはいまだ隠しきれない悦びが溢れていて、龍斗は困惑しながら改めてその女性と向かい合う。

「……………」

龍斗は女性の顔を見て微かな違和感を覚えた。初めて見る顔のはず

なのに、なぜかは分からないがひどく懐かしい気持ちになったのだ。自分の感情の理由が分からず、龍斗はどう応えればいいのか考えつかないので、困った顔で沈黙を返してしまう。

「うーん。何から話そうかな。久しぶりに会ったから話したいことはたくさんあるのに、時間はそんなにないのよね…。」

「え、時間がないってなんのこと？ いや、それよりも……久しぶり??」

女性は難問を考えるように顎に手を当てて思案するが、龍斗は女性の言葉の意味が分からず、つい素で質問をする。

「あ、そつか！ この姿じゃあ、私が誰かなんて分かんないよね。それじゃあまずは自己紹介ね。」

そう言うとな性はどこかいたずらをたくらんでいそうな表情を面に浮かべた。

「私の名前はリーフェルシーク。時限と生命を司る月の女神よ！ ……そして」

女性、あらためリーフェルシークはそこで一旦言葉を止めると、徐々に右手を挙げて指を振った。

すると、リーフェルシークの体を銀色の光が包み込む。光が少しずつ消え去り、そこには……

「！? ……おばあちゃん!!」

龍斗はその相手の姿を見て、驚愕の声をあげた。
その場にいたはずのリーフェルシークの姿は消え、薄いブラウンの髪にわずかに緑がかったセピア色の瞳をもつ、穏やかな雰囲気を纏う六十代ぐらいの女性がいた。
その姿は、龍斗の祖母の姿そのままだったのだ。

「フフフ…。どう？驚いた？」

先ほどよりもわずかに低くなり、落ち着きが増した声音で、リーフェルシーク…。蒼木リオナが龍斗に問いかける。

「本当に…本当におばあちゃんなの？」

龍斗は信じられない思いで問い返す。

龍斗の祖母のリオナは、龍斗が十五歳の時に行方不明になっていたのだ。

彼女を愛していた祖父は、最期時まで彼女のことを探していた。
リオナは龍斗の心情を察したのか、どこか寂しげで労るような表情を浮かべていた。

リオナは何かを振り切るように頭をふり、もう一度手をあげ、銀色の光を出現させる。光が収まった後には女神の姿に戻ったリーフェルシークがいた。

「龍斗…。改めて自己紹介するわ。私は、時限と生命の女神リーフェルシーク。そして、あなたの祖母蒼木リオナよ。」

龍斗は、明かされた事実には驚きを越えて頭が真っ白になっていた。
それと同時に、最後に祖母と別れた時の記憶が頭をよぎる。

（確か、あの時…、「また会おうね。龍斗…」って言われたような気がする……）

「どうして……？」

―女神とは、どういうことなのか？

―どうして、今俺は生きているのか？

―なぜ、俺たちの前から居なくなっただのか？

幾つもの疑問が頭に渦巻き、龍斗は意味を為さない問いを発していた。

リーフェルシークは龍斗の問いに首を傾げたが、龍斗の状態を察したのか、労るように龍斗の頭を撫でた。

「ごめんね。びっくりさせて。…龍斗が納得出来るようにちゃんと説明するわ。だから、私を信用してほしいの。」

龍斗はまだ少し混乱していたが、とりあえずその言葉に頷いた。

「さて、まずは私のことについて、なぜ人として生活していたかを含めて話そうか？」

だいぶ落ち着いた龍斗に、リーフェルシークは隣り合わせに座って話し始める。

「あなたには言っ てなかったけど、私、実は記憶喪失だったの。」

「記憶が…、つまり自分が神様だったこと忘れてたの。」

「まあ、そう言うことになるね。」

龍斗の言葉にリーフェルシークは、顔をしかめて肯定する。

自分のことなのに忘れていたことが悔しいらしい。

だが、その表情はすぐに優しいものに变化した。

「でも、おかげで竜^{たつと}与に会えたし、今こうしてかわいい孫とお話できるから、私的には嬉しい結果かな。」

リーフェルシークは龍斗に優しく微笑みながら、何かを懐かしむような顔をする。

「おばあちゃん……」

「あ！でも、神界は大変だったみたい！」

いい雰囲気は一瞬で崩れた。

（そう言えば、おばあちゃんて、かなりマイペースだったけ……）

龍斗は少しだけ泣きなくなった。

「あ、そうだ！おばあちゃん、さっきの時間がないってどういうこ

と？」

龍斗のこの質問に、リーフェルシークは数秒間フリーズ。

「あああ！そうだった！！」

（忘れてたんかい！）

その反応に、龍斗は心の中でツツコミを入れる。

「ええと、実はここって神界なの。純粹な神以外は、一瞬で即死してしまうの。」

龍斗の場合は、私がここに結界を張っていることと神の血をひいていることで、死なずに済んでいるんだけど……、それも半日しか持たないのよ。」

「ええ！神界ってそんなに物騒なの！？」

自分が既に、一度死んでいることも忘れてパニックになる龍斗。

「そういう訳で、龍斗を私がいる……というか、神として存在している異世界に転生させようと思ってるの。」

「へ？異世界？」

「そうよ。私は、シリア＝グラウンドっていう世界の神なの。」

「へえ〜。」

だんだん非常識な展開に慣れてきた龍斗は、もう何でもいいという心境になっていた。

現実逃避的な意味もあつたが……。

「まあ、そう言う訳で、あなたを転生させるわ。でも、ひとつ問題があつて……、そのまま転生させるわけにはいかないのよ。」

「問題つてなに？」

「実は、私に会つたことで龍斗のもつ神の力が覚醒しちゃつたのよ。」

「え、神の力つて俺にそんなものがあつたの？」

「今までは、私が神として存在している世界じゃなかったから、力も眠つていたから関係なかったけど、私に会つたし、これからこっちの世界で暮らすなら、力も顕在することになるわ。その力つていうのが魂に由来するものなんだけど、人の身体のままでは耐えきれなくて、制御できない可能性があるの。」

「制御できなかつたら、どうなるの？」

自身に関わる不穏な話題に、龍斗は不安を感じながら、恐る恐る尋ねる。

「……死んじゃうかも？」

「……転生する意味無いじゃん!!」

龍斗は、返つてきた答えについて大声でツツコんでしまう。

「大丈夫だよ。ちゃんと対抗策は考えてあるから。」

「対抗策？」

「ええ、私が貴方に加護を与えればいいのよ。」

「加護？」

意味の分からない単語が出てきたので、龍斗は、はて？と首を傾げる。

「加護っていうのは神が与える恩恵のようなものよ。

それぞれの神様で得られる効果は違うのよ。

ちなみに、私は不老長寿と全能力の強化よ。身体能力とか魔力とかのね。私の“加護”で強化された身体なら、神の力にも耐えられるようになるから、死ぬ心配もなくなるわ。

本当はそれを得るためには面倒な条件があるんだけど……、まあ、龍斗は私の孫だから特別に、今から授けてあげるね。」

（いいんだろうか？）

“加護”というのは、どうやらすごいもののようなだが、事情があるとはいえ、こんなに簡単に授けていいのか、当事者である龍斗も疑問に思ってしまう。

「龍斗、ちょっと立ってくれる？今から“加護”をかけるから。」

リーフェルシークに言われて、龍斗が立ち上がるとリーフェルシークが正面に立つ。

何をするのかと、龍斗が興味津々で見守っていると、リーフェルシークはおもむろに手を伸ばし、龍斗の胸元に指先で触れる。

その途端、龍斗は身体が熱くなるのを感じた。リーフェルシークが触れている場所から、凄まじい勢いで力が流れ込んでくる。

だが、それを凌駕する勢いで身体の中から、リーフェルシークが流し込んでくるものとよく似た力が沸きだし、二つの力が渦を巻くように身体中をめぐっていく。

龍斗には永く感じられたが、実際にはそれほど時間は掛からず、二つの力の渦は収まり、リーフェルシークは龍斗から手を離れた。

「今の力が“加護”？」

龍斗は自身の身体が根本的に作り替えられたような感覚に戸惑いながら、一応リーフェルシークに確認する。

「うん。半分当たりで半分外れかな。」

「え、半分？じゃあ、残りの半分は？」

「もちろん貴方の力よ、龍斗。私の力に反応して覚醒していた力が表にでてきたのよ。」

自分の身体を見てみなさいな。」

「身体？……わあ！何で縮んでるだ！？」

龍斗は自身を見下ろして驚きの声をあげた。

今まで大人の姿をしていたのに、その姿は十歳程度の子供に変わっていたのだ。

「フフフ…。驚いた？貴方の魂は神の力があるし、私の力で不老長寿になったから、魂のあり方に共鳴して身体が若返っているのよ。」

「えつと？ということとは、いまの俺の魂は人で言つと十歳ぐらいのことか。」

うん？俺ってどれくらい生きることになるの？」

「そうね？だいたい3000年ぐらいかな。魂の力からみた感じだと……。」

「はっ？3000年！！そんなに！？」

龍斗は想像以上に長い自身の寿命に、驚きと戸惑いを覚える。あまりにも長すぎて実感が湧かないのだ。

それに、そんなに長く生きる存在は自分以外ないだろうから、色々まずいのではないかと、龍斗は危惧していた。

「龍斗。そんなに気にしないで。」

これからあなたが行く世界には、超命種と呼ばれる種属がいくつも存在しているし、人も元の世界より長生きで、2000年ぐらいは生きる人が大半だから。」

リーフェルシークにも龍斗の不安は分かっていたのか、努めて明るい口調で気にしないように告げる。

龍斗も心配をかけることは、本意ではないので一応頷いておく。

「あと、胸元を見てみて。」

リーフェルシークに言われて、龍斗が自分の胸元を見ると、月と何かの植物が抽象化された紋様が浮かんでいた。

「それは私の紋章よ。ちなみに、その植物は月桂樹って言う植物で、勝利を象徴するとされているの。」

最後に、龍斗、これをもって行きなさい。」

そう言ってリーフェルシークが差し出したのは、星空を閉じ込めたような、漆黒の幅広の腕輪だった。

「それは、貴方の願いのままに姿を変える力があるの。もし壊れてしまっても、貴方の力に反応してすぐに修復されるわ。貴方がこれから過ごす場所では、きっと必要になるから。」

「うん。ありがとう。大切にするね。」

「さて、名残惜しいけど、もう時間がないから、貴方を新しい世界に送るわよ。」

準備はいい？龍斗。」

「うん。大丈夫だよ。」

本当は、もう少し話していたかったがそうするとますます別れ難くなるので、龍斗は頷く。

リーフェルシークも悲しげな表情だったが、一度だけ龍斗を抱きしめると、後ろに下がって距離をとり、手を祈りの形に組んだ。

龍斗の下に光の輪が出現し、龍斗の身体がその中に沈み出す。

「おばあちゃん、また会おうね！」

視界から少しずつ消えて行くリーフェルシークの姿に、龍斗が声をかけると、嬉しげな笑顔がかえってきた。

その光景を最後に龍斗の意識は闇の沈んでいった。

第三話：再会（後書き）

このお話で、プロローグは終了です。
次のお話は、転生十五年後となります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9545y/>

神の孫と真緑の瞳

2011年12月21日01時56分発行